



オールすみだで盛り上がる！すみだでボクシング競技実施が決定！！



決起大会(6月27日 すみだりバーサイドホール)

■ボクシング競技

実施が正式決定！

6月26日の国際オリンピック委員会(IOC)総会において、ボクシング競技の実施が正式に決定されました。

墨田区両国の国技館が、ボクシング競技会場に決定していたものの、IOCは、総括団体の国際ボクシング協会(AIBA)のガバナンス(組織統治)に問題があるとし、ボクシング競技を、東京2020オリンピック競技から除外する可能性があることを示唆していました。

そこで、東京2020オリンピックでのボクシング競技実施を目指し、日本ボクシング連盟

がIOCに提出するため、全国で署名活動を展開していました。

競技会場となる国技館を擁する本区もこの活動に賛同し、地域の熱意で国技館でのオリンピックを実現させ、区の発展や地域活性化につなげられるよう、区内関係団体等のご協力のもと、署名活動を実施しました。一か月という非常に短期間にもかかわらず、2万1000人を超える方々に署名をいただき、山本区長から日本ボクシング連盟に署名を手渡しました。

そして、ついに6月26日、ボクシング競技の実施が正式に決定されました。そこで、すみだの新たなスタートとするため、

6月27日に、日本ボクシング連盟や墨田区オリンピック・パラリンピック地域協議会、区内関係団体のほか、ボクシング現役のトップ選手やオリンピック日本代表として、これまで活躍されてきたオリンピックが集結し、「オリンピック・パラリンピックに向けて力を合わせて頑張ろう!」と心を一つにしました。

2020年の東京オリンピックで、そして両国の国技館で、日本選手が活躍することを期待しましょう。

■ボクシング競技会場について

つぎに、ボクシングの競技会場になった両国国技館を紹介します。

両国国技館の歴史は古く、遡ること今から100年以上前の1909年、激動の時代に生まれました。関東大震災や第二次世界大戦、日本大学への譲渡、蔵前国技館などの変遷を経て、1984年に現在の両国国技館が完成、1985年の1月場所から使用されています。

ちなみに、両国国技館という呼称は一般的に用いる通称で、正式な名称は「国技館」になります。

また、国技館といえば相撲ですが、ボクシングやプロレス、コンサート、株主総会なども行われています。

そして、国技館名物「国技館やきとり」をご存知ですか。相撲と焼きとりには繋がりがありませんが、相撲では「土俵に手をつく」ということは負けということになり、両足で立って手をつかない鶏は、げん担ぎとして相撲との深い関わりがあるそうです。そして、相

撲観戦の定番となっている「国技館やきとり」ですが、何と国技館の地下1階で作られているそうです。

■もうひとつの見どころ

聖火リレー

聖火リレーは、古代オリンピックから東京2020オリンピック競技大会開会式まで、一つの聖なる火をつないでいくものです。2020年3月26日に、福島県のナショナルトレーニングセンターJヴィレッジをスタートし、日本全国857市区町村の世界遺産、名所、旧跡、地域の人に愛されている場所などで実施され、121日間かけて日本全国を巡ります。

墨田区では、2020年7月20日に、聖火リレーが行われる予定です。ルートの発表はこれからですが、こちらもぜひ応援してください。

56年ぶりに東京で行われる2回目のオリンピックとパラリンピック。すみだは国技館でボクシングが行われます。オリンピックがこんなに身近で行われるのは、一生に一度かもしれません。ぜひ、オールすみだで応援しましょう。

(墨田区オリンピック・

パラリンピック準備室)

すみだの商店街

～その1～

現在、墨田区内には42の商店街があります(全国では13000弱、東京都2500弱)。戦前には商店街という組織はなく、戦後に小売商業集積地が商店街になったと言われています(1962年に全国商店街振興組合法設立)。



1927年(昭和2年)商店街の様子

墨田区は、町工場、もの作り産業の街として栄え、商店街の顧客の多くは町工場の経営者、従業員及びその家族でした。町工場が活気のある時は、商店街も元気がありましたが、1976年～1999年にかけて、町工場の減少、大型店の出店を要因として、区内の商店数は減少傾向になりました。大型店との競争の中で、特に生鮮食品など生活必需品を取り扱う商店は大きな影響を受け、廃業に追い込まれるケースが増えました。商店街には空き店舗も増えつつありましたが、有効な打開策を見い

出せませんでした。また2000年には、大型店から小売商業を守ってくれている「大法」が撤廃(街づくり三法に移行)された影響も大きく、小規模小売店舗を多く持っている商店街にとつても大変厳しい時代になりました。その当時の墨田区商店街の課題としては、区内人口の減少と高齢化の進展による購買力の低下、消費者ニーズ、ライフスタイルの変化への対応などが挙げられ、問題は山積していました。一方で、現在は2009年に成立した「地域商店街活性化法」にあるように、商店街には地域コミュニティの担い手としての役割が求められています。地域の文化的伝統を継承する存在であった事に加えて、少子化、高齢化を始めた事、地域課題を解決していく為の核としての役割の重要性が増しています。



1985年(昭和60年)商店街の様子

商店街がその自主的、自律的な取り組みを通じて、地域の生活者や住民とのふれあい、出会いのプラットフォームになるという大切な役割を担って行く事が求められています。昨今、災害が発生している中、共助(周囲の人たちと助け合う事)の重要性も多く問われています。地域を巻き込んで行う商店街のコミュニティイベントは、収益に関わらず、すべき地域貢献の一つであり、共助を作る意味でも重要だと言われています。

商店街は、価格、品揃えなど、大型店にはかなわない部分も多々ありますし、ネット販売の便利さにもかかいません。しかし、商店街には地域弱者と言われる高齢者、子供達を見守る場としての役割、地域の安心、安全な場所作り、人と人との絆を作る場所作りを担っている事もご理解頂ければと思います。

地域活動、商店街活動を継続して行くためには、各個店の自助努力が必要不可欠です。商店街は、個々のお店の集合体です。皆様の周りにも、素晴らしいお店はいくつもあると思います。

最近の事例に、商店街活性化三種の神器と言われる「まちゼミ」「まちバル」「100円商店街」があります。商店街活性化事業と言われていますが、どちらかと言うと、個店にお客様を呼び込んで、お店の中に入って



七夕まつり(下町人情キラキラ橘商店街)

頂き、店主と触れ合って頂く、コミュニティション事業です。これからは、商店街に魅力のあるお店がいくつあるかで、商店街価値が上がるとも言われています。区民の皆様、ご自分にとって無くなって困ると思ってお店が近くにありますら、是非ご利用頂きたいと思えます。

商店街は地域における準公共財であり、地域住民の生活を支えるライフラインである

(向島橋銀座商店街協同組合

事務局長 大和 和道)